

下顎右側Eの歯根に生じた骨性癒着が強く疑われる症例について

○假谷直之
(おまち子ども歯科・岡山市)

【緒言】

骨性癒着は乳歯の萌出中に起こった場合、萌出不全を惹起したり、永久歯との交換期では後継永久歯萌出の妨げとなり、また咬合誘導、歯列矯正の際の妨げともなる。今回は、この骨性癒着疑いの症例の経験を文献的考察とともに報告する。

【症例概要】

初診時年齢：4歳2か月
主訴：右下奥歯が生えてこない
全身的既往歴：特記すべき事項なし
局所的既往歴：主訴部位以外の歯牙萌出に異常はなかった
家族歴：特記すべき事項なし
診断：
下顎右側E，萌出不全（近心歯根部骨癒着の疑い）

【処置および経過】

一次的な処置として、下顎右側E（以後、右下Eと略記）の歯冠部歯肉を開窓しボタン付着の上、歯牙牽引を予定するも施術の段階で患児の拒否と保護者の無理をしたくないという希望により施術中止、経過観察となった。この時点では、右下6番は年齢的に未だ萌出しておらず、同歯萌出にあたっては近心傾斜が懸念されたが、その後、約三年半経過時点では右下Eの埋伏状態に変化はなく、すでに萌出済みの右下6番の位置や傾斜は臨床的に問題なかった。同時点で右下E部舌側部歯肉に後継永久歯歯冠（右下5番）と思われる若干の膨隆が認められたことより、今後、同歯（右下5番）の萌出はあるものと考えられた。

【まとめ及び考察】

今回、右下E萌出前の近心歯根、骨性癒着の疑いの症例を経験した。骨性癒着の症例は非常にまれということであるが、ひとたび遭遇すると咬合育成の面から困難をきたすということを改めて痛感した。

上顎右側犬歯の開窓・牽引から歯列誘導を行いながら困難を呈した一例

○伊東泰蔵，深水 篤¹
(医)いとう歯科医院，¹(医)伊東歯科口腔病院)

【目的】

上顎犬歯の萌出は種々の経路をたどる結果となり、埋伏や隣接歯根に影響を及ぼすことで牽引等の治療に苦慮することが多い。

そこで、今回は咬合管理中の7歳時にパノラマ線撮影を行ったところ異常はなかったが、約2年後の経過では思わぬ結果となり、牽引と歯列誘導において困難を示したが、最終的には歯列内に収まる事ができたので報告する。

【方法】

症例は、咬合管理中の7歳0か月の女子、う蝕治療や顎骨内での犬歯の動きを1年7か月観察した。その後、4番が近心方向に傾斜移動を開始したので、犬歯がなお口蓋側への動きを認めたために矯正前治療を開始した。先ずDを抜歯して4番の萌出を促した。そこで犬歯の萌出スペースを確保するために、DBSとナスのホルディングアーチを装着して、CT撮影後開窓術と牽引を行った。

【結果】

CT所見では、パノラマ線写真とは異なり右側犬歯の位置は深部にあり、開窓術は困難であると予想された。約2年の牽引を行った後、明らかな支持組織の退縮や治療期間の延長、不十分な歯根のコントロールなどのリスクが増大する結果となったが、矯正治療でのトルク操作で歯軸の改善を得ることができた。

【考察】

咬合管理中のパノラマ線を再度診査してみると、上顎Dの歯根と4番の歯冠部の位置関係が左側は乳歯根に密着しているが、右側は離れた状態で、犬歯も深部に位置している。いかにも回避現象を疑うような所見を認めた。同C、Dの歯髄診断の計測は行っていなかったため詳細不明となったが、臨床的には乳歯の感染根管による歯肉の炎症は認めなかったし、濾胞性歯嚢胞も疑ったが所見がなかった。